

2008年2月22日 KFシステムコントローラの改定

KFシステムコントローラ、および、それを構成する各種マクロファイルを改定いたしました。基本的な改定項目は、ファイルをダブルクリックした時に、エクセル2007形式の拡張子にも対応したことですが、それ以外にも各マクロ毎に変更点があります。

ユーザーの方は、ダウンロードページよりダウンロードをお願いいたします。

今回は、ユーザーの方向けの改定ですが、個々のマクロについて今まで無償公開してきたものについては、追って公開したいと思いません。それまで、今しばらくお待ちください。

以下、KFシステムコントローラへの記載順に説明いたします。

なお、マクロを実行するためのショートカットキーは、各ファイルのトップページの上部に、赤太字で記してありますので、そちらをご参照ください。

また、マクロを実行する際は、実行するファイル以外は閉じておいてください。他に開いているファイルがあると、それらのファイルに重大な損傷を与える場合があります。

さらに、KFシステムコントローラおよび配下の各マクロファイルに記載されたフォルダ名は、ご自身の環境に合わせて修正してください。フォルダ名が正しくないと、これらのファイルをKFシステムコントローラなどから開いたり、マクロを実行したりすることができません。

まず、ファイル更新マクロですが、ファイルバックアップおよびそれに加えてシャットダウンを指定する際に、バッチファイルを実行するように変更いたしました。

それによって、マクロを修正しなくても、ご自身のPC環境に応じてバックアップ内容を変更できるようになりました。

バッチファイルは、KFシステムコントローラの、「3. ユーティリティ」3-7項に記載されたファイル名をダブルクリックすることで、編集が可能です。

これらの内容を書き換えることで、バックアップ時の保存先などを設定できます。なお、このバッチファイルは自動実行マクロでも共通となっています。

バッチファイルの記述方法につきましては、ブログ「Kフローのシステムトレード奮闘記」の2008年2月5日の記事などを参考にしてください。

バッチファイルのファイル名は固定していますが、それを保存するフォルダは任意に決定することができます。

フォルダ名を、ファイル更新マクロのE5セルにフルパスで入力してください。また、末尾には必ず半角の¥を付けてください。これは、後で述べる自動実行マクロでも同様です。

株価データ取得更新マクロは、ファイル群の整合性を取るため、名称を変更いたしました。"株価"を外して、単に「データ取得更新」マクロとしました。それ以外に変更点はありません。

システム更新マクロは、全面的に改定いたしました。従来は、単に日付を更新するだけだったのですが、日付と共にチャートも更新できるようにいたしました。

チャートを更新するかどうかは、G列のchrt更新欄のチェックを"1"にするかどうかで決定できます。チェックを"1"にすると、チャート更新を行います。

また、従来は未来の日付分に関しては、チャート表示が乱れたままだったのですが、システムを更新するたびに、直近日までのチャートを表示するように改めました。

これによって、直近の株価や資産等の状態が判断しやすくなりました。

システム更新に関する以上の改定によって、チャート表示が改善されますが、その分、システム更新に若干の時間が掛かってしまいます。

時間が掛かりすぎる場合は、チャート更新のチェックを外してみてください。

なお、日付間隔、日付最小値、日付最大値の欄は、チャート更新を行うためのものです。これらには計算式が入りますので、値を入力する必要はありません。

特に、日付最小値に関しては、株価データファイルを参照するようになっています。

従来のシステム更新マクロを更新するには、「3. ユーティリティ」3-4項のシステム更新マクロ更新ファイルを実行してください。

まず、C4セルに、新しいシステム更新マクロを保存したフォルダ名を、フルパスで入力します。続いて、6行目以降に、新しく作成するシステム更新マクロと、従来のシステム更新マクロとの、保存しているフォルダ名とマクロのファイル名を、それぞれ入力していきます。

C列とD列が新しく作成するシステム更新マクロ、E列とF列が従来のシステム更新マクロとなります。フォルダ名は両者で同じでも構いませんが、ファイル名は必ず別名にしてください。

登録が完了したら、マクロを実行します。すると、新しいシステム更新マクロファイルが作成されます。

システム更新後、従来のシステム更新マクロと新しいシステム更新マクロとの間に、登録システムの相違がないか確認を行った上で、必要ならば従来のシステム更新マクロを削除してください。

なお、A列には続き番号、B列には銘柄名を入力します。特に、B列の銘柄名には、株価データファイルのファイル名に用いられている銘柄名を入力してください。

例えば、株価データファイル名が「7203トヨタ01.xls」の場合は、7203トヨタとします。

株価データファイルは、証券コード+銘柄名+01.xlsというファイル名になっていることを前提としていますが、もしも異なったファイル名を使用している場合は、システム更新マクロのE列の日付最小値欄にある[0001dummy01.xls]の箇所の0001dummy以外の部分を修正してください。

なお、システム更新マクロ更新ファイルは、従来のシステム更新マクロに対して一度適用すればOKです。新しいシステム更新マクロに対しては、絶対に適用しないようご注意ください。

KFシグナルチェッカーについては、大きな変更点はありません。ちなみに、KFシグナルチェッカーの運用に当たり、実際に運用中の銘柄や、監視中の銘柄の背景色を塗り分けると便利です。
当該銘柄の行のA列からE列までのセルの背景色を変更した場合、その設定は更新を行っても破棄されません。

性能一覧についても、大きな変更はありませんが、KFシグナルチェッカー同様にセルの背景色を変更した場合、更新のたびにE列の設定が破棄されるという問題を修正しました。
これによって、性能一覧においても、KFシグナルチェッカー同様の背景色設定が可能となりました。

なお、KFシグナルチェッカーおよび性能一覧は、システム更新マクロと同様に、銘柄毎に作成して保存している場合が多いと思われます。それらを一一つ手作業で再登録するのは大変ですので、更新用マクロをご用意いたしました。

「3. ユーティリティ」3-5項のシグナルチェッカー更新、および3-6項の性能一覧更新を実行すると、従来の各マクロを、新しいマクロに更新できます。
両者の使用方法は全く同一ですので、シグナルチェッカー更新について以下に説明いたします。

まずC5セルに、新しいKFシグナルチェッカーを保存したフォルダ名をフルパスで入力します。続いて、C列とD列の6行目以降に、従来のKFシグナルチェッカーを保存してあるフォルダ名と、そのファイル名を入力していきます。

システム更新マクロ更新ファイルの場合とは異なり、B列の銘柄名が更新作業に影響を与えることはありませんが、統一性を保つためにシステム更新マクロ更新ファイルと同様に設定してください。
登録完了後、マクロを実行すれば、KFシグナルチェッカーが更新されます。

なお、システム更新マクロ更新の場合とは異なり、KFシグナルチェッカー更新では、従来ファイルを書き換えます。また、ファイル名に変更はありませんので、ご注意ください。

性能一覧更新もKFシグナルチェッカー更新と同じ手順で行ってください。システム更新マクロ更新の場合と同様、これらの更新作業は一度行えばOKです。

自動実行マクロでは、ファイル更新マクロ同様、パッチファイルへの対応を行った他に、株価データ取得にも対応しました。
なお、**同マクロのD8セルの記述に誤りがありました。「株価取得010.xls」とあるところを、「データ取得010.xls」に修正してください。**

今回のパックに同梱した「データ取得010.xls」は、「データ取得更新010.xls」(旧名「株価取得更新010.xls」)と全く同一のものです。
データの更新は基本的に毎日行うものであり、専用ファイルを用意しておく必要がありますが、データの取得は基本的には1回限りであり、必要に応じて準備するだけでいいためです。

データ更新用のファイルをいちいち変更する必要がないよう、データ取得用のファイルを別途設けることにしました。
とは言っても、中身は全く同じものですので、使い方はデータ取得更新マクロと同一です。

株価データ取得から自動実行を行う場合は、以降のシステム最適化およびチャート更新マクロにおいて、始点日や日付最小値の値を自動設定しておく必要があります。
その方法については、後ほど説明いたします。

自動実行を行うにあたり、各マクロ登録は、株価データ取得⇒システムセットアップ⇒最適化演算⇒チャート更新⇒システム一覧作成、の順で行ってください。
複数銘柄について自動実行を行う場合は、各マクロ毎に複数銘柄を登録してもいいですが、上記の実行順序を1セットとして、それを銘柄数分登録しても構いません。

すなわち、株価データ取得1&2⇒システムセットアップ1&2⇒最適化演算1&2⇒チャート更新1&2⇒システム一覧作成1⇒システム一覧作成2、とする代わりに、株価データ取得1⇒システムセットアップ1⇒最適化演算1⇒チャート更新1⇒システム一覧作成1⇒株価データ取得2⇒システムセットアップ2⇒最適化演算2⇒チャート更新2⇒システム一覧作成2、としてもいいわけです。

2番目の方法を用いると、システム作成のスケジューリングが容易になります。基本的には、ベースとなる各マクロに対して、エクセルの置換機能を用いて銘柄を登録していけばOKです。
1セットのスケジューリングを簡単に行うためのマクロ(置換自動化&ファイル生成マクロ)を、近日中に公開する予定です。

なお、複数セットの自動実行を行う場合は、各セット毎に各マクロのファイル名を変更して、それぞれ作成しておく必要があります。その場合は、変更したファイル名を、自動実行マクロに登録してください。

データ取得マクロは、前述した通り、データ取得更新マクロと同一のものです。これは、新規銘柄の株価データを取得する場合に使用します。

自動実行内で用いる場合に注意する点は、データ取得と株価修正のチェックを必ず"1"にすることです。また、自動実行においてデータ取得の開始時間が、立会い日の寄付きから大引け後30分以内の場合、株価更新のチェックは外しておいてください。それ以外の場合は、チェックを"1"にしておいても構いません。

セットアップマクロには、大きな変更点はありません。登録ファイルの拡張子を、Excel2007形式にも対応させただけです。

最適化演算マクロは、始点日と終点日を株価データファイルから参照するようにしました。これで、データ取得から自動実行を行った場合に、始点日と終点日を、データが存在する最大範囲に自動設定できます。

最適化演算マクロに最適化するシステムを登録する場合は、エクセルの置換機能を用いるなどして、始点日と終点日の参照先を当該銘柄の株価データファイルに変更してください。

なお、最大範囲ではなく特定の範囲で最適化演算を行いたい場合は、最適化演算マクロを別名保存した後、始点日と終点日に値を直入力してください。

その場合、自動実行ファイルには、この別名保存した最適化演算マクロを登録してください。

チャート更新マクロでは、チャートの日付最小値を、株価データファイルの最初の日付を参照するようにいたしました。また、日付間隔を自動設定するように変更しました。

通常は、この設定で構わないと思いますが、チャートの表示範囲を変更したい場合は、最適化演算マクロの場合と同様に、別名保存を行った上で、設定を変更してください。

チャート更新マクロにシステムを登録する場合は、最適化演算マクロの場合と同様に、エクセルの置換機能を用いるなどしてください。特に、日付最小値の参照先の変更漏れがないよう、ご注意ください。

さらに、従来のチャート表示において、株価増減や資産残高などのマイナス幅が大きくなると、X軸目盛の表示がチャート内に入り込んでしまうという問題を修正しました。

当面、マイナス幅の最大を500万円として設定していますが、これを超える場合には再び表示が乱れる場合があります。その場合は、マクロ内のActiveChart.Axes(xValue).CrossesAtの値を更に小さくすれば、対処できます。

システム作成一覧には、Excel2007形式の拡張子への対応以外に大きな変更点はありません。ただ、システム更新マクロの元ファイル名を、新しい名前に変更しました。

フォルダ名やファイル名については、冒頭でも述べましたように、ご自身の環境に合わせて変更してください。

各マクロに、配下のファイルが正しく登録されているかを確認するためには、そのファイル名をダブルクリックしてください。もしも目的のファイルが開けば、そのファイルは正しく登録されています。開いたファイルに問題があった場合は、それを修正した上で上書き保存をしてください。

ダブルクリックをしてもファイルが開かずに、「エクセルファイルを開いてください」というメッセージが出る場合は、フォルダ名かファイル名に間違いがあります。

登録してある名前を確認して、修正を行ってください。

また、ファイル更新や自動実行を行う場合にも、登録してある各マクロのファイル名をダブルクリックして、登録内容に間違いがないか十分に確認した上で、マクロを実行してください。

その際、確認のために開いたファイルを必ず閉じてから、マクロを実行するようにしてください。

最後に、ドキュメントギャラリーについて説明いたします。「3. ユーティリティ」3-8項にドキュメントギャラリーを追加しました。ファイル名をダブルクリックすると、ドキュメントギャラリーファイルが開きます。

このファイルには、今までにサイトにアップロードしました、KFシステムクリエイター取扱説明書やシステム解説などを登録してあります。

なお、これらのファイルは、今回のパックにも加えましたので、ご利用ください。

ドキュメントギャラリーにPDFファイルを登録すると、そのファイル名をダブルクリックすることでPDFファイルが開きます。ただし、事前にAdobe Reader 8をCドライブのProgram Filesフォルダ以下にインストールしておく必要があります。

インストール先がCドライブでなかったり、Adobe Readerのバージョンが異なる場合は、pdfファイルをダブルクリックしても、ファイルを開くことができません。

通常は、インストール時にインストール先を手動設定していなければ大丈夫ですが、もしもインストール先が異なる場合は、マクロを修正する必要があります。

VBEを開いてコードを表示した後、該当箇所のフォルダ名を修正してください。

また、ファイル名に空白が含まれている場合にも、ファイルを開くことができません。その場合は、ファイル名を変更して再登録してください。

KFシステムクリエイター取扱説明書は、ファイル名に空白を含んでいたため、今回のパックにはファイル名を変更して同梱しました。

また、拡張子が".txt"、".doc"、".bat"のファイルを登録すると、そのファイルをダブルクリックすることでメモ帳が開き、ファイルの中身を閲覧したり修正したりすることができます。

なお、エクセルファイルについては、登録の対象にはしませんでした。したがって、エクセルファイルを登録してファイル名をダブルクリックしても、「ドキュメントファイルを選択してください」というメッセージが出るだけです。

ドキュメントギャラリーには、フォルダ名の次の列にファイル名を記述するというルールさえ守れば、どのようなレイアウトでもドキュメントファイルを登録することができます。

とりえず、Page01には取扱説明書やシステム解説などを登録してありますが、Page02やPage03は空白のまま残してあります。

これらのシートでも、ファイルを登録すればドキュメントを開くことができますので、ご自由にご利用いただけたらと思います。

以上、ご不明な点等ございましたら、お問い合わせページよりお問い合わせください。また、不具合等ございましたら、メールやブログへのコメントでも構いませんので、ご連絡をいただければ幸いです。